

瀧廉太郎

瀧廉太郎（1879-1903）は、日本の近代音楽史上最も影響力のある作曲家の一人として知られている。日本で初めて西洋音楽の技法を使って作曲し、その代表的な作品は現在でも聴かれている。

瀧廉太郎は東京生まれ、幼少期は父親の役所勤めの関係で全国を転々としていた。父親が現在の竹田市を含む地域の知事に任命された時から、彼の人生において特に影響が強かった時期が訪れた。廉太郎は 12 歳から 15 歳までの 2 年半をこの町で過ごし、学校でピアノを習った。この学校は、瀧の代表作のひとつである「荒城の月」のモチーフになったといわれる岡城跡の近くにあった。

瀧は 1901 年に東京音楽学校を卒業し、その後ドイツのライプツィヒに留学した。しかし、ライプツィヒで結核を患い、重病となる。帰国後は大分市で晩年を過ごし、わずか 23 歳でこの世を去った。

西洋の奏法を取り入れた瀧は、日本の音楽に革命を起こした。「荒城の月」は 100 年以上にわたって学校の教科書に掲載され、「お正月」や「花」などの曲も今日まで親しまれている。